

- winter: a prediction experiment. J. Meteor. Soc. Japan, 65, 871-883.
- 54) Nakamura, K. and T. Asai, 1985: A numerical experiment of airmass transformation processes over warmer sea. Part 2, J. Meteor. Soc. Japan. 63, 805-827.
- 55) Ikawa, M., H. Sakakibara, M. Ishihara, and Z. Yanagisawa, 1987: 2-D simulation of the convective snowband observed over the Japan Sea: the structure and time evolution of the multicellular convection. J. Meteor. Soc. Japan. 65, 605-632.
- 56) 山岸米二郎, 1983: 関東地方の局地的悪天候時の場の特徴の数値シミュレーション. 天気, 531-538.

### 日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
第35回山の気象シンポジウム	1991年6月15日		気象庁	Vol. 38, No. 3
第28回理工学における同位元素研究発表会	1991年7月1日 ～3日	同運営委員会	国立教育会館	Vol. 37, No. 12
第14回極域水圏シンポジウム	1991年7月9日 ～10日	国立極地研究所気水圏シンポジウム	国立極地研究所講堂	
降水洗浄と大気-地表間交換過程に関する国際会議	1991年7月15日 ～19日	カナダ気象海洋学会・アメリカ気象学会	リッチランド	Vol. 37, No. 8
第23回乱流シンポジウム	1991年7月23日 ～25日	日本流体力学学会	名城大学理工学部	Vol. 38, No. 3
第2回計算流体力学シンポジウム	1991年7月26日 ～27日	日本流体力学学会	名古屋大学工学部	Vol. 38, No. 3
第20回測地学・地球物理学連合総会	1991年8月11日 ～24日	IUGG	ウィーン	Vol. 36, No. 12
第8回エアロゾル科学技術研究討論会	1991年8月21日 ～23日	エアロゾル研究協議会	総評会館(東京)	Vol. 38, No. 3
HEIFE(地空相互作用に関する日中共同研究)ワークショップ	1991年9月22日 ～28日		中国(蘭州)	Vol. 38 No.
『小氷期の気候』国際シンポジウム	1991年9月25日 ～28日	日本地理学会古気候復元研究グループ	八王子(東京都立大学)	Vol. 37, No. 8
日本気象学会平成3年度秋季大会	1991年10月23日 ～25日	日本気象学会	名古屋国際会議場	
Quardrennial Ozone Symposium	1992年6月4日 ～13日	IAMAP/IOC	アメリカ Virginia 大学	
第11回雲と降水に関する国際会議	1992年8月17日 ～21日	IAMAP/ICCP	カナダ モントリオール McGill 大学	Vol. 38 No. 4
第13回ニュークリエーションと大気エアロゾルに関する国際会議	1992年8月24日 ～28日	IAMAP, CNA, ICAP	アメリカユタ州ユタ大学	Vol. 38, No. 1

編集後記: 3月28日, 日本南極地域観測隊第31次越冬隊及び第32次夏隊が無事帰国しました。俗に夏隊を「日帰り組」, 越冬隊を「1泊組」と呼びますが, これは極夜・極昼のある高緯度地方での行動をもじったもので, 頭の中はともかく, 身体は国内の皆さんと同様歳をとります。浦島太郎になるわけではありません。「頭の中」の方は, これも俗に「南極ボケ」という症状を呈します。各隊によって症状の違いがあるようで, 筆者の参加した第30次隊では「オペレーターに感染するコンピューターウイルス」症候群が猛威をふるいました。これに感染すると, 知らないうちにミスタイプして大切な文書や記録, プログラム等を消去してしまい, オペレーターは自分のミスに気付かず大騒ぎして周囲に迷惑をかけるとい

うもので, 一時期昭和基地は騒然となりました。

このような「ボケ」は, 国内に比べ圧倒的に少ない情報量によるようです。越冬中は雑誌類の数も限られるため, 1冊の本をそれこそ何回も繰り返し読みますが, 帰国して本屋の店先に溢れる山を前にすると, どれを読んだらよいものやら迷ってしまいます。「天気」の編集に携わる者として, 読者の皆さんに隅々まで読んでいただけるものをお届けできるよう頑張らねば…。(宮本仁美)

これまで編集後記の著者名はイニシャルが大部分でしたが, 会員の方々から名前を明記して, 責任を明確にすべきであるとの声がいくつか寄せられておりました。これらに対応するために, 本号から編集後記も記名記事とすることに致しました。(編集委員長)